種田博之 著

『パラドクスとしての薬害エイズ』
——医師のエートスと医療進歩の呪縛——

(新曜社, 2019 年, 四六判, 302 頁, 2,400 円 + 税)

北村健太郎
(立命館大学)

本書は、知識社会学、科学社会学を専門とする筆者が、いわゆる「薬害エイズ」と呼ばれた現象を医学の「価値と規範の複合体」=医学のエートスという視点から論じる野心的な単著である。

「エイズ」が社会問題と認識された 1980 年代当時、HIV 陽性者は直接間接に厳しい「エイズ差別」を受けた。現在でも「エイズ」はメディアで特殊な扱いを受けることがしばしばある。そのような歴史的背景もあって、これまでの「エイズ問題」にかかわる人文社会学の研究は、HIV 陽性者に寄り添った研究が多い。HIV 陽性者本人の発信を支援する社会的要請もあっただろう。こうした現代社会の底流に流れる「エイズ差別」や「エイズ問題」を念頭に本書を評する。

本書の構成を説明する。筆者は、誤解を招かぬように、本書は「薬害エイズ」への知識社会学からのアプローチであることを本書冒頭で丁寧に述べる。第 1 章では、読者の理解を助けるために、血友病ならびに HIV/AIDS に関する医学的説明および医療の歴史的変化を概観する。第 2 章では、「薬害エイズ」言説が何に焦点を当てて、逆に何を無視したかを検討する。第 3 章から第 6 章が本書の本論にあたる。第 3 章では、1980 年代前半の医師の血友病治療の認識を医学文献から考察する。第 4 章では、医師が血友病のリスクを重視した背景に、血友病治療における「価値と規範の複合体」=医学のエートスを見出す。第 5 章は、医学の不確実性の議論から HIV/AIDS の不確実性を考察する。第 6 章では、HIV/AIDS のリスクが鮮明になる時期に医師が血友病のリスクを重視した背景を論じる。最後の終章では「薬害エイズ」の検討から意思決定のあり方を検討する。

評者は、本書はたいへん意欲的な単著であると評価するとともに、とても惜しまれる単著と考える。本書は、筆者の問題関心である医師の「価値と規範の複合体」=医学のエートスをより深く論じれば、さらに有意義になったに違いない。本書は、医師および患者（家族）に対する聞き取り調査および医学論文などの文献を手堅くまとめている。なおさら、「薬害エイズ」という用語を相手にせず、筆者の問題関心を論じるべきだったと惜しまれる。言うなれば、主題と副題が逆なのである。

たとえば、序論冒頭に「HIV に感染してしまうという被害——痛ましい『薬害』——が起こった。いわゆる『薬害エイズ』である」(1 頁)とある。これは間違いではないが、1980 年代前半に血友病患者や血友病コミュニティが出会ったのは「エ

イズ問題」であって「薬害エイズ」ではない。序論の注 [2] で「その当時（1980年代前半）、……『薬害』といった捉え方は皆無に等しかった」（210 頁）と注釈があるが、その労力は第 3 章以降に注ぐべきである。評者は、本書の本論である第 3 章から第 6 章を高く評価している。だからこそ、「薬害エイズ」のエピステーメーに引きずられた章が残念である。

評者は「薬害エイズ」のもとになったと思われる「薬害としてのエイズ」という語を確認している。「薬害」と「エイズ」のあいだの「としての」に「エイズ問題を薬害として捉えるなら」という当時の空気が感じられる。詳細は、拙著『日本の血友病患者の歴史——他者歓待・社会参加・抗議運動』（生活書院、2014 年）を参照されたい。また、「エイズ問題」と呼ばれた時期は、セクシャル・マイノリティの人々との共闘の可能性がわずかに残されていた。セクシャル・マイノリティの視点からは、新々江章友『日本の「ゲイ」とエイズ——コミュニティ・国家・アイデンティティ』（新曜社、2013 年）を御覧いただきたい。

書評の対象書籍から離れたけれども、「エイズ問題」や「エイズ差別」の歴史的文脈から生成された「薬害エイズ」は議論の起点に適さない。決定的な問題は「薬害エイズ」は差別の契機を内包する点である。草伏村生は『冬の銀河——エイズと闘うある血友病患者の訴え』（不知火書房、1993 年）で「『薬害エイズ』とは……米国からの輸入濃縮血液製剤によってエイズに感染した血友病患者を指す。『いけないエイズ』とは性行為や、薬物中毒患者が未消毒の注射針を回し打ちしたことによって HIV に感染した者を指すのだが、何が“いけない”のだろうか」（206 頁）と血友病患者の加害性を指摘している。

「薬害エイズ」は訴訟の短期的戦略では効果的だったろう。筆者も述べるように、訴訟の支援者を増やし、原告を実質的勝訴に導く原動力となった。しかし、中長期的な将来への教訓に「薬害エイズ」は有効と思われない。まず、先述したように、差別の契機を内包し、差別を再生産しかねない。次に、「薬害エイズ」は「エイズ問題」の構造をまったく表していない。

「エイズ」にかかわる人文社会学の研究は、2020 年代の新たな時代を迎えて「薬害エイズ」のエピステーメーの呪縛から解放たれるときではないだろうか。